

異文化適応クラスにおける 学生の意識変遷に関する通年調査

大味 潤

Cross-Cultural Education Effects on College ESL Students for One Year

OOMI, Jun

Abstract

The researcher has been conducting cross-cultural training in his ESL classes at several Japanese four-year colleges. Though he has already examined various effects of his classroom activities in his previous researches, these researches were based on his surveys in which the students gave their feedbacks only at the end of the one-year course. Therefore, the researches were never able to present how the students' attitudes toward English were at the beginning, how they had changed through the classes, and how they ended up when finishing the course.

The purpose of the survey was to investigate how Japanese college students changed themselves through his course. In this research, the researcher examines the effects of his classroom activities on three different times; before starting the course, when finishing the first semester, and after completing the course. This paper presents the year-round data of 2012 and 2013. The data demonstrated various elements and aspects of the students' minds and attitudes toward English. They also indicate some directions to modify his researches as well as his classroom activities in the future.

要 約

4年制大学の必修英語において異文化適応の通年クラスを数か年に渡って行ってきたが、これまでその成果は年度末の調査でしか表せなかった。その為今回は、授業開始時、1学期終了時、そして年度末の3回に渡り数値データを取ることで学生の意識変遷と授業の成果を検証する。先行研究に当たる1学期のみ半年のデータでの調査を

踏まえ、今回は通年のデータを2年度分を使い、さらに上位クラスと下位クラスの類似点並びに相違点を論じる。またその結果を基に、当授業の有効性と問題点と修正方向、さらに今後の研究の方向性も併せて論じてゆきたい。

キーワード

第二言語としての英語教育 (Teaching English as a Second Language)

異文化教育 (Cross-cultural Education)

英語コミュニケーション (English Communication)

大学英語教育 (College English Education)

1. はじめに

今回は2012年度に実施した半年間の調査（大味2013）のその後を検証する。調査目的は、筆者が4年制大学の必修英語の授業で行っている異文化適応のクラスにおける学習者の意識変遷を、数値データとして調査し分析することである。これまで様々なクラスにおいて年度末のみのデータは取っていた（大味：2007、2010、2011A、2011B）が、受講開始時の学生の英語に対する受容態度や英語に対する考え方、またその心理状態がどのようなものであり、それが受講中にどう変化しつつあり、その結果どう変化したかについては教員側の推測の域を超えていなかった。その為今回は新学期の受講開始時、受講中（前期終了後）、そして受講後（後期終了後）と3回に分けて学習者の意識を1年通して縦断的に調査した。今回は前回の調査（大味2013）での研究、つまり前期のみのデータの検証の後、後期終了時で取得したデータを加えた通年のデータを基に、1年間の授業の総括と今後の研究課題の検証を行う。また後述するように翌年度2013年度のデータを追加し、比較対象を行いつつその結果を論じる。

2. 調査対象

2.1 対象クラス

調査対象のクラスは尚美学園大学の必修英語のうち、前回の調査（大味2013）と同様に2012年度、さらに翌年の2013年度に筆者が担当した英語Ⅲ＆Ⅳの4クラスずつ（情報表現学科2年生対象）、計2年8クラス分である。尚、前期はⅢ、後期はⅣで名称が変わっているが、受講生は数人の再履修生を除き同一の為、以下の本文並びに各表での名称は全て英語Ⅲとした。

再履修生については1学期で履修を終えてしまう者と通年で履修する者、また当クラスでの受講経験の有無などデータに与える影響因子が複雑になってしまった為、今回のデータでは全て除外した。その為、2012年度の4月と7月の数値データは前回と若干異なっていることをお断りしておく。また欠損データについては全て除外している。

本来2012年度の調査では総合政策学部英語ⅠとⅡの1年生も対象にしていたのだが、その後後期のサンプル数が激減し、クラスによっては再履修生の方が多くなりデータが適性を欠いてしまった。その為、今回の調査では情報表現学科の学生だけを対象に修正した。また諸般の事情によ

り前回の調査の発表までに1年以上が経過し、その間2013年度のデータ収集が終わっていた為、対象データを入れ替えての発表とする。

表2-1 調査対象クラス並びに学生情報

年度	アンケート回答者数									
	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	合計	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	合計
4月	20	22	19	20	81	11	19	16	13	59
7月	18	19	17	19	73	8	15	7	8	38
1月	18	18	17	15	68	7	14	9	5	35

* 7月、1月の回答数は期末試験を受験した人数であり単位修得をした人数ではない

クラス名称の後の○囲み数字は、入学時のプレイスメントテストによる区分であり、数字の小さい方から成績の高い順となっている。参考までに2012年度の情報表現学科の英語Ⅲ／Ⅳは①～⑧まで、2013年度は①～⑨までである。故に分類上では2012年度が上位クラス（以下「上位」と表記）、2013年度が下位クラス（以下「下位」と表記）となり、年度こそ違え同専攻内での比較となった。

2.2 調査内容

調査内容は前回同様、以下1)～7)の7項目を紙面アンケートにより実施した。各項目に該当する質問は、それぞれ右の通りのままである。尚、2013年度では8)、9)等のように質問項目を修正・追加してあるが、詳細は以下を参照されたい。

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1) 英語全般についての態度 | - 問1、問2 |
| 2) 英会話力への憧れ | - 問3、問3-1 |
| 3) 海外への憧れ | - 問4、問4-1、問5、問5-1 |
| 4) 英会話力やコミュニケーション力についての考え方 | - 問6、問7 |
| 5) 他人との対面コミュニケーション | - 問8-0、問8-1、問8-2、
問9-1、9-2 |
| 6) 人前での緊張 | - 問10-1、問10-2 |
| 7) 英会話に必要なもの その1 | - 問11-1、問11-2、問11-3 |
| 8) 英会話に必要なもの その2 (2013年度追加) | - 問11-4、問11-5、問11-6 |
| 9) 将来の英語 (2013年度追加) | - 問2-2、問5-2、問7-1、問12 |

アンケートは各年度とも4月、7月、翌年1月の計3回行っているが、学生の意識や考え方の変遷を調べる為に年度内では内容は変えていない。質問項目やその順序、回答方法の詳細については、2012年度は前回の論文を、2013年度については今回の文末の資料に添付したので参照されたい。

3. 調査方法

1回目の調査は各年度4月初旬の各授業の初回に実施した。これは当クラスの授業内容が学生に影響を与えないうちにデータを取る為である。2回目は7月末、前期の最後に当たる期末試験終了の直後に実施した。これは受講して4カ月後、授業数にして16回目に当たる。3回目は各年度末である1月末の期末試験終了後に実施した。これは受講開始から延べ9か月後の32回目に当たる。所要時間はいずれも5分程度である。

4. 質問とデータ分析

前回同様数値データのみであった為、アンケート結果はそのまま筆者が入力し、学科、クラス名、選択コース名、性別等のサブカテゴリーは割愛した。クラス別のデータは今回も示すが、基本的には2012年度の上位4クラスと2013年度の下位4クラスとを比較して論じる。ちなみに指標数値はいずれも7段階評価（最小値1、中間値4、最大値7）である。

4.1 英語全般について

まずは英語全般に対する質問、問1「英語は好きですか。」、問2「英語は得意ですか。（2012年度）」「自分の英語力をどう思いますか。（2013年度）」の2問で学生の英語に対する基本的な態度を聞いた。問1では文字通りに英語の好き嫌いを、問2では英語力の自己評価を問うている。これらの数値がプラスに向上することが当クラスの目的である。2012年度の数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごく思う」であり、問2の2013年度は「1：低いと思う～7：高いと思う」である。

表4-1-1 好き嫌い

	問1. 英語は好きですか。									
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	4.6	4.0	3.7	3.1	3.9	2.6	2.8	1.6	2.8	2.5
7月	5.2	4.6	4.6	4.3	4.7	3.4	3.4	2.3	3.6	3.2
1月	5.1	4.9	5.0	4.1	4.8	4.1	4.1	3.4	3.7	3.8
数値変化	+0.5	+0.9	+1.3	+1.0	+0.9	+1.5	+1.3	+1.8	+0.9	+1.3

*丸数字は各英語のクラス名を表す（以下同様）。

表4-1-2 自己力評価

	問2. 英語は得意ですか。(2012年度) ／問2-1. 自分の英語力をどう思いますか。(2013年度)									
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	3.3	3.0	2.7	2.3	2.8	1.5	1.7	1.5	1.8	1.6
7月	3.8	3.1	3.2	2.9	3.3	1.5	2.2	1.6	2.1	1.9
1月	3.9	3.7	3.4	3.1	3.5	2.3	2.2	1.8	1.8	2.0
数値変化	+0.6	+0.7	+0.7	+0.8	+0.7	+0.8	+0.5	+0.3	0.0	+0.4

まず4月当初のデータを見ると、両年度開始時の違いが見て取れる。好き嫌いを尋ねた問1では上位3.9に対し下位2.5と数値差にして1.4の開きがあり、上位では好きでも嫌いでもないという意見に対して、下位では好きではないと回答していることになる。また得意不得意を尋ねた問2では上位2.8に対し下位1.6と数値差で1.2の開きがあるが、これは上位でも苦手意識があり、下位では苦手そのものを意味する最低指標点1に近い。これが翌年の1月の時点ではそれぞれ、問1の2012年度で4.8（+0.9）、2013年度で3.8（+1.3）と向上しており、英語を好きになった学生が増えているのが分かる。また問2では2012年度で3.5（+0.7）、2013年度で2.0（+0.4）と僅かだが向上している。先に述べた当クラスの目的の1つが達成されたことになる。

この数値結果について思い当たるのは、会話コミュニケーション中心のクラスで使うことを楽しんだ結果英語を少し好きになったが、課題で英文読解や英文和訳もしているのも、苦手意識はそれほど改善していないということなのだろう。

4.2 英会話力への憧れ

次に問3「英会話が出来たらいいと思いますか。」(2012年度)、問4「英会話に興味はありますか。」(2013年度)で英会話力への憧れや興味について聞いた。先の問1、問2で尋ねた英語好き嫌いや苦手意識の有無に拘わらず、現代の学生ならば興味・関心があるはずだと予想して設定した設問である。数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごくそう思う」である。

表4-2-1 英会話への憧れ・興味

	問3. 英会話が出来たらいいと思いますか (2012年度)。 ／問3-1. 英会話に興味はありますか (2013年度)。									
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	5.6	6.2	5.9	4.9	5.6	3.1	3.7	3.1	3.9	3.5
7月	6.0	6.4	5.9	5.9	6.1	4.4	4.3	3.6	4.5	4.2
1月	6.1	6.6	6.2	6.1	6.2	4.3	4.4	4.3	4.5	4.3
数値変化	+0.5	+0.4	+0.3	+1.2	+0.6	+1.2	+0.7	+1.2	+0.6	+0.8

4月のデータでは2012年度が5.6に対して2013年度が3.5となっている。これが1月のデータでは6.2、4.3とそれぞれ+0.6、+0.8と向上している。1年間の会話練習を通じて、それが憧れにせよ

興味にせよ、改善していることが伺える。

しかし質問自体を変更したのが影響したのか、年度を跨いでその数値は大きく変わってしまった。2012年度では全てのクラスにおいて最大の数値が出ていたが、2013年度では数値は大きく下がっている。単なる憧れを尋ねた2012年度の質問では直接的過ぎると考え、興味・関心を尋ねる質問に変更したのだが、心理的に影響が強過ぎたようである。ちなみに2012年度の総合政策学部の下位の1年生でも英語Ⅰで5.3を示していたことを考えても、質問の変更が大きく左右したと言わざるを得ない。下位クラスの学生にとっては苦手意識が強過ぎて、「憧れ」なら持てても「興味」は起こらないということなのであろう。

4.3 海外への憧れ

次に尋ねたのは学生の海外旅行や海外留学への希望についてで、問4「海外旅行は。」、問5「海外留学は。」（2012年度）、問5-1「海外で生活してみたいですか。」（2013年度分）に該当する。いずれも選択指標は（1：全然したくない～7：是非したい）である。結果は以下の表4-3-1（2012年度分）、表4-3-2（2013年度分）の通りである。

表4-3-1 海外旅行・海外留学への憧れ（2012年度分）

	問4. 海外旅行は。					問5. 海外留学は。				
年度	2012年度									
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均
4月	5.6	6.0	5.6	5.1	5.6	4.1	4.9	4.7	3.6	4.3
7月	5.8	6.1	6.1	5.2	5.8	4.6	4.7	4.9	3.8	4.5
1月	5.6	6.1	5.5	5.7	5.7	4.3	5.2	4.5	4.3	4.6
数値変化	0.0	+0.1	-0.1	+0.6	+0.1	+0.2	+0.3	-0.2	+0.7	+0.3

表4-3-2 外国人との会話・海外生活への憧れ（2013年度分）

	問4-1. 外国人と話してみたいですか。					問5-1. 海外で生活してみたいですか。				
年度	2013年度									
クラス	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	3.0	3.1	2.8	3.5	3.1	3.2	4.0	2.6	2.6	3.1
7月	3.5	3.9	3.4	4.5	3.8	4.5	4.6	3.6	3.1	4.0
1月	4.7	4.3	4.4	5.0	4.6	4.9	4.7	4.1	4.5	4.5
数値変化	+1.7	+1.2	+1.6	+1.5	+1.5	+1.7	+0.7	+1.5	+1.9	+1.4

教員側としては当授業を通じて向上が見込まれる英会話力、異文化適応能力、コミュニケーション力が、学生の海外への目に肯定的に働くと思っていたが、2012年度の数値データでは1年を通じて問4で4月、7月、1月、数値変化がそれぞれ5.6、5.8、5.7で結果+0.1、問5で4.3、4.5、4.6なので結果+0.3とほとんど変化はなかった。これは初期の数値が比較的高いことに加え、単に海外旅行としたのでは台湾や韓国など英語圏に限らないことや、英語圏であっても英語を使う可能性が必ずしも高くないことや、また海外留学への興味関心についても、昨今の学生の保守的

傾向や保護者の財政事情等により、そもそも全体的に低くなっていることが影響していると考えられる。

その為2013年度は問4-1、問5-1のように質問を変えてみたのだが、こちらの数値はそれぞれ3.1、3.8、4.6で結果+1.5、3.1、4.0、4.5で結果+1.4のように順調に向上した。全体的に数値がやや低いのはやはり下位クラスならではのかもしれないが、2012年度と比較しても明らかに数値の伸びが高い。4月の数値が低かったこともあるのだろうが、ここでは設問の変更が功を奏したと考えられる。

4.4 英会話力やコミュニケーション力についての考え方

次に問6にて英語力、問7にてコミュニケーション力と英語の関係について尋ねた。問6「自分の英語は外人に通じると思う。」は自身の英語の実践力にどれだけ自信があるかの設問である。当クラスは日本人学生のための為、授業内で外国人と話す機会はないのだが、そのような会話練習を繰り返す中で、「外人に通じる」という実感または錯覚を学生が持つことで、英語に前向きに取り組むようになれば授業として成功であろう。

また問7の「英語が通じなくても外人とコミュニケーションは可能だと思う。」では、英語を話す自信が無い故にコミュニケーションを取ること自体を諦めてしまったり、押し黙ってしまったりする学生に、ジェスチャーや他の視覚情報その他を使えば気持ちを伝えることは出来ることを授業内活動を通し練習させているので、学生の意識改革が起こることを教員として期待していた。結果は以下の表4-4の通りである。数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごく思う」である。

表4-4-1 英会話力について

問6. 自分の英語は外人に通じると思う。										
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	2.4	2.4	2.1	1.7	2.1	1.5	1.7	1.4	1.8	1.6
7月	3.4	3.1	2.6	2.2	2.8	2.6	2.4	2.0	2.3	2.3
1月	3.9	3.8	3.1	2.9	3.4	2.4	2.6	2.3	1.8	2.3
数値変化	+1.5	+1.4	+1.0	+1.2	+1.3	+0.9	+0.9	+0.9	0.0	+0.7

表4-4-2 コミュニケーション力について

問7. 英語が通じなくても外人とコミュニケーションは可能だと思う（2012年度） ／英語が通じなくてもコミュニケーション出来ると思いますか（2013年度）。										
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	4.7	4.7	3.8	3.5	4.2	4.0	3.9	3.6	3.8	3.8
7月	4.6	4.4	4.1	4.3	4.4	4.1	3.8	3.4	4.0	3.8
1月	5.0	4.9	4.2	4.9	4.7	5.4	3.9	4.4	3.5	4.3
数値変化	+0.3	+0.2	+0.4	+1.4	+0.5	+1.4	0.0	+0.8	-0.3	+0.5

まず問6の英会話力について見ると、4月は2.1、1.6と両年度とも非常に低い数値のスタートとなっている。これが単に学生自分の思い込みから来たものなのか、あるいは実際に通じなかった経験のせいなのか、その経験の有無も併せて調査する必要がある。しかし1月になるとそれぞれ3.4、2.3とそれぞれ+1.3、+0.7と改善しているので一定の効果はあったと考えられるが、上位クラスの方が効果は若干高かったようである。またクラス⑨の数値のみが7月に一旦上昇してから1月に降下しているのは先の質問と同様である。

これに対し問7では、4月の時点で各年度4.2、3.8とほぼ中間値からスタートし、1月には4.7、4.3とそれぞれ+0.5ずつ向上している。問6との数値の開きの原因は不明であるが、設問自体に「自分」という表現が無かった為、自身の英語力とは無関係に一般論として捉えた可能性が高い。またこの設問では特にクラス④と⑥で+1.4と向上したのに比べ、クラス⑦では数値が変化せずクラス⑨ではまた下降しているが、それぞれクラスの雰囲気が結果として左右したと考えられる。

4.5 他人との対面コミュニケーション

次に問8「知らない人に話し掛けられるのは。」と問9「知らない人に自分から話し掛けるのは。」では他人とのコミュニケーションの得手不得手を尋ねた。これはケータイ、スマホ、PC等のデジタル機器に精通しているインターネット世代の学生が、今回の主題である英語でのコミュニケーションや異文化間コミュニケーション以前の問題として、そもそも対人コミュニケーションが苦手ではという前提で作成したもので、知らない人と話すのが日本語でも不得手であろうと考えたからである。上記の論点を明確にする為に、それぞれ日本語の場合と英語の場合と分けて尋ねた。

またもう一つの切り口として、話し掛けられる状態と話し掛ける状態とを分けたのは、見知らぬ人に話し掛けるのが苦手な日本人は、一旦話し掛けられて話し始めてしまえば会話が行えるのに対して、自分から会話をスタートさせるのが苦手であろうという前提があったからである。こ

表4-5-1 他人との対面コミュニケーション その1

問8. 知らない人に話し掛けられるのは (8-1.日本語／8-2.英語)。										
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
8-1./4月	4.5	4.0	4.4	4.4	4.3	4.3	4.4	3.9	4.5	4.3
/7月	4.4	4.6	4.4	5.3	4.7	4.5	3.7	4.4	5.1	4.4
/1月	4.8	3.8	4.5	5.3	4.6	4.3	4.1	4.0	5.5	4.5
数値変化	+0.3	-0.2	+0.1	+0.9	+0.3	0.0	-0.3	+0.1	+1.0	+0.2
8-2./4月	2.5	2.9	2.5	2.0	2.5	1.7	1.9	1.4	2.0	1.8
/7月	3.1	3.0	2.7	3.1	3.0	3.3	2.4	2.3	2.3	2.5
/1月	3.9	3.4	3.1	2.7	3.3	3.3	2.7	2.0	2.3	2.6
数値変化	+1.4	+0.5	+0.6	+0.7	+0.8	+1.8	+0.6	+0.6	+0.3	+0.8

表4-5-2 他人との対面コミュニケーション その2

問9. 知らない人に自分から話し掛けるのは (9-1.日本語／9-2.英語)。										
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
9-1./4月	3.6	3.1	3.2	3.6	3.4	3.9	3.3	3.3	3.2	3.4
/7月	3.5	3.3	3.6	4.5	3.7	4.3	2.7	3.3	3.8	3.5
/1月	3.8	3.6	3.8	4.7	4.0	4.0	3.3	3.3	4.3	3.7
数値変化	+0.2	+0.5	+0.6	+1.1	+0.6	+0.1	0.0	0.0	+1.1	+0.2
9-2./4月	2.1	2.2	1.8	1.6	1.9	1.5	1.5	1.2	1.7	1.5
/7月	2.8	2.2	2.3	2.7	2.5	1.9	2.3	2.3	2.0	2.1
/1月	2.9	3.1	2.6	2.7	2.8	2.7	2.4	1.6	2.2	2.2
数値変化	+0.8	+0.9	+0.8	+1.1	+0.9	+1.2	+0.9	+0.4	+0.5	+0.7

4月当初のデータは偶然ながら一致した。両年度とも日本語の場合、問8ではともに4.3、問9では3.4となり、数値差では予想通りと言える。すなわち知らない人に話し掛けられる方が自分から話し掛けるより楽であり、これは日本語・英語を問わないということである（英語では2012年度は2.5対1.9、2013年度では英語で1.8対1.5）。この差は1月のデータでも見て取れ、日本語では2012年度で4.6対4.0、2013年度でも4.5対3.7である。英語ではそれぞれ3.3対2.8、2.6対2.2であった。

また数値変化を見ると、問8で日本語の場合は2012年度、2013年度それぞれ+0.3、+0.2と微増なのに対し、英語では共に+0.8と改善しており、問9でも日本語がそれぞれ+0.6、+0.2の数値に対して、英語では+0.9、+0.7と改善していた。ここで断っておくが当クラスでは主なアクティビティーのペアワークの際、話し掛けたり話しかけたりする設定で練習をしているのであって、実際に相手に話しかけたり話しかけられているわけではない。ただペアワークの際には次の相手が予めお互いに分かっているため、「知らない人」ではないものの、相手に話しかけること自体には抵抗が無くなっているのである。問9での9-1の+0.6はそういうことを示唆しているのかもしれない。

参考までに2013年度では問8-0「自分は社交的だと思いますか。」として、自分の社交性そのものを尋ねてある。結果は以下の通りである。

表4-5-3 他人との対面コミュニケーション その3

問8-0. 自分は社交的だと思いますか。					
年度	2013年度				
クラス	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
8-0./4月	3.4	3.0	2.8	2.9	3.0
/7月	3.5	3.1	3.8	3.4	3.4
/1月	3.4	3.5	3.0	3.7	3.4
数値変化	0.0	+0.5	+0.2	+0.8	+0.4

クラスによっては変化が無いところ（クラス⑥）や、改善されているところ（クラス⑨）もあるが、全体としては+0.4と微増に留まっている。

4.6 人前での緊張について

次に問10「人前で話すのは。」で、人前でどの程度緊張せずに話せるかを問うた。これは恥文化の中で成長した結果、他人の目を気にしがちで、かつ完璧主義を目指す傾向にある日本人であれば共通の問題であろう。つまり外国人と英語を話す以前の問題で、そもそも日本語で相手が日本人であっても人前で話すこと自体が苦手という予想の元で設けた質問である。教員としてはこの苦手意識が授業を通じて改善されれば、日本語でも英語でも段々慣れてくるだろうと予期した。結果は表4-6の通りである。数値指標は引き続き「1：すごく苦手～7：全然平気」である。

表4-6 人前での話し

	問10. 人前で話すのは。(10-1.日本語／10-2.英語)。									
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
10-1./4月	3.6	3.5	3.1	3.0	3.3	3.6	3.1	2.8	3.3	3.2
/7月	3.7	4.1	3.6	4.7	4.0	4.1	2.8	2.9	4.5	3.6
/1月	4.4	4.0	3.9	4.7	4.2	4.1	3.3	3.1	3.3	3.5
数値変化	+0.8	+0.5	+0.8	+1.7	+0.9	+0.5	+0.2	+0.3	0.0	+0.3
10-2./4月	2.7	2.7	1.8	2.1	2.3	1.7	1.5	1.2	1.8	1.6
/7月	2.9	3.4	2.2	3.3	3.0	1.9	2.4	2.0	2.5	2.2
/1月	3.5	3.9	2.9	3.1	3.4	3.3	2.9	1.8	1.8	2.4
数値変化	+0.8	+1.2	+1.1	+1.0	+1.1	+1.8	+1.4	+0.6	0.0	+0.8

問10-1の「人前で話すのは（日本語で）」では4月当初2012年度は3.3、2013年度は3.2と共にやや苦手というところで、1月になると上位クラスで4.2と+0.9好転しているが、下位クラスでは3.5と+0.3の微増に留まっている。また問10-2の「人前で話すのは（英語で）」ではいずれも低い値であるが、2012年度では4月の2.3から1月は3.1と+1.0、2013年度ではそれが1.6から2.4と+0.8と向上している。それぞれ英語で話す際の抵抗感が若干軽減しているようである。

またクラス別で観察すると、2012年度のクラス④、並びに2013年度のクラス⑧⑨で数字が7月に一旦好転したものの、1月に再び下降しているのが注目される。これは授業の後半に難しい会話のタスクをこなさなければならず、学生によっては消化不良を起こしていたことが思い出される。これは特に⑨クラスで顕著に観察されており、1回の授業内容が時間内に度々終了しなかったことが影響していたことと思われる。

しかしデータ全体としては、日本語英語問わず人前での会話練習や発表に慣れてきていることが窺える。羽目を外してクラスメートを笑わせたり、また誰かが失敗しても笑って流せたりする余裕が学生の間に自然と起こっていたのが印象的であった。

4.7 英会話に必要なもの

最後の設問、問11の「英会話に必要なものは何だと思いますか。」では、まず最初の質問3つでワールドイングリッシュ（WE）について尋ねた。WEとはアメリカ、イギリス人等のネイティブスピーカーが話す第1言語としての英語ではなく、第2言語話者がコミュニケーションとして使用している世界共通語としての英語を指す。そこでは文法や語彙用法や発音が若干異なっているものとする考えがあるが、それらは日本人が拘りがちな項目なので、授業活動を通して学生の意識がどの程度変化するかを調査する為である。設問の意図としてはこれらの項目が、実際の英語でのコミュニケーションに於いて必ずしも重要ではないことが、学生にどの程度伝わったかの検証でもある。

また2013年度はさらに3つ質問を追加して、当授業で向上が期待される「リスニング力」、また教授項目である「話す時の態度」「英語文化のルール」についても尋ねた。結果は以下の通りである。数値指標は「1：全然そう思わない～7：すごくそう思う」である。

表4-7-1 英会話に必要なもの その1

		問11. 英会話に必要なものは何だと思いますか。 (11-1. 文法力／11-2. 単語力／11-3. きれいな発音)。								
年度	2012年度					2013年度				
クラス	Ⅲ①	Ⅲ②	Ⅲ③	Ⅲ④	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
11-1./ 4月	4.7	4.8	4.9	4.3	4.7	3.6	3.8	3.5	4.4	3.8
／ 7月	4.7	4.5	5.0	3.9	4.5	3.9	3.4	3.8	4.1	3.8
／ 1月	4.8	4.7	4.6	4.3	4.6	4.0	4.1	3.6	4.0	3.9
数値変化	+0.1	-0.1	-0.3	0.0	-0.1	+0.4	0.3	+0.1	-0.4	+0.1
11-2./ 4月	5.9	6.1	5.6	5.4	5.7	5.2	5.1	4.6	5.5	5.1
／ 7月	5.9	5.5	5.8	5.4	5.4	5.3	4.3	4.3	5.5	4.8
／ 1月	6.1	6.0	5.6	5.3	5.7	5.7	4.9	4.8	5.2	5.1
数値変化	+0.2	-0.1	0.0	-0.1	0.0	+0.5	-0.2	+0.2	-0.3	0.0
11-3./ 4月	5.3	5.5	5.3	4.7	5.2	4.8	4.6	3.9	4.6	4.5
／ 7月	5.2	5.3	5.6	5.4	5.4	5.5	4.5	4.4	5.0	4.8
／ 1月	5.4	5.6	5.3	5.1	5.3	6.0	5.0	4.6	5.2	5.2
数値変化	+0.1	+0.1	0.0	+0.4	+0.1	+1.2	+0.4	+0.7	+0.6	+0.7

最初の3項目を見るといずれも数値の高い順に「単語」「発音」「文法」になっているが、上位クラス①②の単語力での6前後の数値を除けば、いずれも中間値の4～5前後とそれほど高くない。またそれぞれ上位下位のクラスで若干の開きがあるものの、年間を通じてほとんど変化は無いことが分かる。教員側の意図が伝わっていると一応解釈出来るだろう。しかし2013年度下位クラスでの発音に対する意識の変化のみが顕著である。他のクラスとの違いは授業中も特に見受けられなかったが、原因について唯一思い当たるのは、会話練習を通じてこれまで気にしていなかった自分やクラスメートの発音に意識が向くようになり、結果として気になり始めたということくらいであるが詳細は不明である。

表4-7-2 英会話に必要なもの その2 (2013年度)

	問11. 英会話に必要なものは何だと思いますか。 (11-4. リスニング力／11-5. 話す時の態度／11-6. 英語文化のルール)									
	11-4. リスニング力					11-6. 英語文化のルール				
クラス	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	5.5	4.7	4.9	4.8	5.0	4.6	4.2	3.9	4.8	4.4
7月	5.8	4.9	4.9	5.5	5.2	5.9	5.2	4.4	5.3	5.2
1月	6.1	5.4	5.0	5.3	5.5	5.7	5.2	4.8	5.7	5.3
数値変化	+0.6	+0.7	+0.1	+0.5	+0.5	+1.1	+1.0	+0.9	+0.9	+0.9
	11-5. 話す時の態度									
クラス	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均					
4月	5.5	5.1	4.5	4.8	4.9					
7月	5.8	5.1	4.5	4.9	5.1					
1月	6.3	5.7	5.0	5.5	5.9					
数値変化	+0.8	+0.6	+0.5	+0.7	+1.0					

また2013年度に追加した項目では、問11-4の「リスニング力」については+0.5と微増に終わっている。こちらは宿題として課していたCDのリスニング、授業内で行っていた子音や母音の聞き取り練習、並びに会話練習の際の相手やクラスメートの発話の聞き取り等、影響を与える因子が複数あるので原因は特定出来なかった。

一方で教授項目である問11-5「話す時の態度」、11-6「英語文化のルール」についてはそれぞれ+1.0、+0.9と改善が見られた。これはそれぞれ情報の発信者としての話す側の態度が特に英語コミュニケーションに於いては重要であること、また会話での間の処理の仕方や会話そのものの運び方などの異文化項目が日米でかなり異なっていることなどを学習しているので、その成果が一応出ていると考えられる。

4.8 将来の英語

以上の設問に加えて2013年度では問2-2.「自分の人生に英語は必要ですか。」、問5-2.「英語を使って仕事をしてみたいですか。」、問7-1.「英語の勉強は自分で続けたいですか。」、問12.「外国人と何かを一緒にやっていけると思いますか。」と追加した。これらは当クラスで授業を終えた学習者が、近い将来社会人となった時にどう英語と付き合っていくかを尋ねたものである。数値指標は問2-2、問5-2、問7-1では「1：全然そう思わない～7：すごくそう思う」、問12では「1：全然したくない～7：是非したい」であり、結果は以下の通りである。

表4-8-1 将来の英語 その1 (2013年度分)

	問2-2. 自分の人生に英語は必要ですか。					問7-1. 英語の勉強は自分で続けたいですか。				
年度	2013年度									
クラス	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	4.1	4.0	3.6	4.1	3.9	2.5	2.6	2.6	3.1	2.7
7月	4.9	4.3	4.4	4.5	4.5	3.3	3.6	3.1	3.6	3.4
1月	4.9	4.6	4.9	4.0	4.6	3.1	3.3	3.3	2.8	3.1
数値変化	+0.8	+0.6	+1.3	-0.1	+0.7	+0.6	+0.7	+0.7	-0.3	+0.4

表4-8-2 将来の英語 その2 (2013年度分)

	問5-2. 英語を使って仕事をしてみたいですか。					問12. 外国人と何かを一緒にやっていけると 思いますか。				
年度	2013年度									
クラス	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均	Ⅲ⑥	Ⅲ⑦	Ⅲ⑧	Ⅲ⑨	平均
4月	2.4	2.6	1.9	2.5	2.4	3.7	3.4	3.4	2.9	3.4
7月	3.0	3.4	2.6	2.8	2.9	4.6	4.1	3.3	4.1	4.0
1月	4.0	3.3	2.6	2.7	3.1	5.0	3.9	3.8	3.8	4.1
数値変化	+1.6	+0.7	+0.7	+0.2	+0.7	+1.3	+0.5	+0.4	+0.9	+0.7

当クラスで英語学習に興味が出てくれば数値が上がる問7-1では、先述のように後期消化不良になったクラス⑨を除いて向上している。またクラス内容が直接影響しないと思われた問2-2でも同じくクラス⑨を除き向上した。授業内容が直接間接に影響したようである。

一方で学生の将来設計に関する設問、問5-2、問12では全てのクラスで向上が見られた。こうしてみると英語コミュニケーションの練習や異文化適応の授業項目が、学生にいい影響を与えたと言えるのではないだろうか。

5. 終わりに

今回の調査は当初、2012年度に担当した7クラスの学生100人以上の英語コミュニケーションに関する意識変遷を1年掛けて縦断的に調査するものとしてスタートしたが、諸般の事情により2013年度まで4クラスずつ計140人を対象にした2年に渡っての調査へ変更となった。こちらの計画とは異なり、計らずも年度を跨いでの調査になったが、偶然にも2012年度の上位クラスから2013年度は下位クラスへと担当が変わった為に、同一専攻の9クラス中8クラスのデータを取ることが出来たお蔭で、コースの全体像が見えてきた。

学生の1年間の意識を4月、7月、1月と数値データを調査することにより、その変化を視覚化することが出来たが、実際に教員自身の授業成果を確認することにより、一定の成果が上がっている反面、授業内容の吟味が不十分だったことも認めざるを得ない。また一方でそれぞれの数値が示唆しているものは、原因を特定出来るものと特定出来ないものに分かれた。特に教員側の予

想と反する数値が全クラスに見られる場合、特定のクラスのみ数値が大きく異なる場合など、数値データのみでは検証が不可能で、対策としては改めて記述解答を求めるか、インタビュー等で直接聞き出すしかないと考える。

前回の調査でも述べたが、教員側の予想と矛盾する箇所は寧ろ学生に開示し、その理由や原因を直接質す方法が最も有力だと考える。詰まる所、担当教員である研究者は自分の主観抜きに自らの授業を顧みることが出来ない為、客観的に分析するには、学生側の意見を言葉として直接拾うインタビューの方が論点を明確出来るであろう。また教員側の意図や教育目標を明らかにした上で学生側の意見を直接聞き出す方が授業改善には有効であろう。今回は時間の関係上実施出来ないままになったが、次回以降の調査には是非含めたい。

参考文献

- 大味 潤、「異文化教育を中心とした英語教育の実践例」、『総合政策学部総合政策研究紀要第16・17号』尚美学園大学総合政策学部、2009、p.95-p.108。
- 大味 潤、「尚美学生の英語ニーズと国際語としての英語についての考察」、『総合政策学部総合政策研究紀要第19号』尚美学園大学総合政策学部、2010、p.67-p.80。
- 大味 潤、「尚美大1年生の英語受容とそのニーズについての考察」、『総合政策学部総合政策研究紀要第20号』尚美学園大学総合政策学部、2011年3月（2011A）、p.1-p.15。
- 大味 潤、「再履修生が語るコミュニケーション型英語授業の長期的効果」、『総合政策学部総合政策研究紀要第21号』尚美学園大学総合政策学部、2011年12月（2011B）、p.113-p.137。
- 大味 潤、「異文化適応クラスにおける学生の意識変遷に関する調査」、『総合政策学部総合政策研究紀要第22、23合併号』尚美学園大学総合政策学部、2013年3月（2013）、p.179-p.193。

アンケート調査 (2013 年度版)

学年	: <input type="checkbox"/> 1 年生	<input type="checkbox"/> 2 年生	<input type="checkbox"/> 3 年生	<input type="checkbox"/> 4 年生
性別	: <input type="checkbox"/> 1. 女性	<input type="checkbox"/> 2. 男性		
学部学科	: <input type="checkbox"/> 1. 情報表現学科	<input type="checkbox"/> 2. 総合政策学科	<input type="checkbox"/> 3. ライフマネージメント学科	
コース	: <input type="checkbox"/> 1. 選択英語コース	<input type="checkbox"/> 2. 各国語文化論コース	<input type="checkbox"/> 3. 不明	

問 1. 英語は好きですか。

全然そう思わない

1 2 3 4 5 6 7

すごくそう思う

問 2-1. 自分の英語力をどう思いますか。

低いと思う

1 2 3 4 5 6 7

高いと思い

問 2-2. 自分の人生に英語は必要ですか。

全然そう思わない

1 2 3 4 5 6 7

すごくそう思う

問 3-1. 英会話に興味はありますか。

全然ない

1 2 3 4 5 6 7

すごくある

問 4-1. 外国人と話してみたいですか。

全然したくない

1 2 3 4 5 6 7

是非してみたい

問 5-1. 海外で生活してみたいですか。

全然したくない

1 2 3 4 5 6 7

是非してみたい

問 5-2. 英語を使って仕事をしてみたいですか。

全然したくない

1 2 3 4 5 6 7

是非してみたい

問 6. 自分の英語は外人に通じると感じますか。

全然そう思わない

1 2 3 4 5 6 7

すごくそう思う

問 7. 英語が通じなくても外人とコミュニケーション出来ると思いますか。

全然そう思わない

1 2 3 4 5 6 7

すごくそう思う

問 7-1. 英語の勉強は自分で続けたいですか。

全然したくない

1 2 3 4 5 6 7

是非したい

↓

↓↓

↓裏面に続く↓

↓↓

↓

問 8-0. 自分は社交的だと思いますか。

全然そう思わない 1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

問 8. 知らない人に話し掛けられるのは。

<日本語で>

すごく苦手

1 2 3 4 5 6 7 7 全然平気

<英語で>

すごく苦手

1 2 3 4 5 6 7 7 全然平気

問 9. 知らない人に自分から話し掛けるのは。

<日本語で>

すごく苦手

1 2 3 4 5 6 7 7 全然平気

<英語で>

すごく苦手

1 2 3 4 5 6 7 7 全然平気

問 10. 人前で話すのは。

<日本語で>

すごく苦手

1 2 3 4 5 6 7 7 全然平気

<英語で>

すごく苦手

1 2 3 4 5 6 7 7 全然平気

問 11. 英会話力に影響するものは何だと思いますか。

<文法力>

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

<単語力>

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

<きれいな発音>

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

<リスニング力>

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

<話す時の態度>

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

<英語文化のルール>

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

問 12. 外国人と何かを一緒にやっていけるといいますか。

全然思わない

1 2 3 4 5 6 7 7 すごく思う

これで終了です。ありがとうございました。